CLCからしだね書店便り

2025 January 1

no.49

＊今月のご案内＊

① 新連載
「歴史と対話し歴史に学ぶ」 第１回

②からしだねおすすめのオリジナル聖書カバー

③読書感想本『ヒルビリー・エレジー』
「トランプ大統領のパートナー」が語る、無視された白人労働者たちの感情

④秋の オンライントークライブ第二弾書き起こし
『本をめぐる対話』【後編】

ＣＬＣからしだね書店では…

1. キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
2. お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
3. ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
4. コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。ドリンクを片手に、本をお楽しみください。
5. 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
6. 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLC INTERNATIONAL

CLCからしだね書店＆カフェ トライアングル
営業時間 11:00-17:00
定 休 日 日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第３木曜日は書店のみ営業

歴史と対話 歴史に学ぶ

中谷 博幸

連載第一回

『イーゼンハイム祭壇画』

これから紹介するのは、山田はじめ（三六才）と森下有一（高一）の対話です。有一の母森下晴子（四一才）が、はじめの姉です。二人は住まいが離れているので、ラインやメールでやり取りしています。

有一： おじさん、入学祝の『パンセ』有難う。難しいけれど、少しずつ読んでいます。その感想は追々書くことにして、今日はひとつ質問があります。昨日学校の図書館で、グリューネヴァルトの『イーゼンハイム祭壇画』を見ました。十字架に架かったキリストのグロテスクな姿がクローズアップされていて、気持ちいいような絵ではなかったです。たしかおじさんは以前、その絵を実際に見た、と言っていましたよね。その時どう感じましたか？

はじめ： ああ、あの図書館ですか、懐かしいですね。僕も高一の時、友だちがなくて、よくそこに逃げ込んで、いろんな本を読んでいました。確か話したことがありましたね。

その祭壇画は、今はフランス、コルマールのウンターリンデン美術館にあります。フライブルクから日帰りで見に行きました。三つの部分に分かれて展示されていて、その第一の中央パネルがキリストの十字架像です。パネルの前の長椅子に座って、じっと見ていました。その時、不思議にグロテスクな感じはしなかったな。背景の黒が印象的で、そのため、むしろ不思議な透明感と冷気と厳粛な思いにとらわれました。この絵は、やはり画集では不十分で、現地で見ると全然違いますね。

▲十字架上のキリスト像部分
『朝日美術館グリューネヴァルト』
（朝日新聞社、1996年）

有一： 相変わらずおじさんは、僕なんかにも丁寧な言葉づかいですね。母さんがよく笑ってますよ、昔から変わってるって（笑い）。独特の方言論をもってるとか。ところで、いつ頃の作品ですか？

はじめ： 一五一二年から一五年と言われています。大切なのは、何のためにつくられたかです。一一世紀頃からヨーロッパでは、ライ麦パンに寄生した麦芽菌が原因で、血管や神経が冒され、激しい痛みとともに、体は暗青色に変色し、遂には壊疽にいたる恐ろしい病いが流行りました。ところが、ヨーロッパにもたらされた聖アントニウスという聖人の聖遺物によってその病が癒やされるという奇蹟が起こり、この病いはアントニウスの火と呼ばれるようになります。そしてこの流行病患者を専門に施療するアントニウス修道会が設立されます。イーゼンハイムの修道院もそのひとつだったわけです。

登場人物　山田はじめ　36才の叔父 …… 歴史に詳しいけれど人間関係を築くのが苦手
森下有一　高校一年生の甥 …… あらゆることに好奇心旺盛

ヨーロッパを中心としたキリスト教の歩みを振り返り、謙遜の学である歴史的アプローチの重要性をともに考えたいと思います。二人は互いに離れて住んでいるので、ネットを利用しますが、叔父のはじめはラインが苦手でパソコンのメールを好み、甥の有一は断然ライン派です。

▲　平日（第一場面）
wikimedia パブリック・ドメイン
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/5/5f/Grunewald_Isenheim1.jpg』（朝日新聞社、1996年）

有一： ということは、当時この絵画を見たのは病に苦しむ患者たちだったのですね。それで、一見グロテスクな絵画の意味が分かりました。患者たちは、十字架に架かった痛々しいキリストに、自分たちと同じ姿、苦しみを見出したのでしょうか。

はじめ： 鋭い感性ですね。有ちゃんは姉さんにそっくりだな。僕も、実際にその絵を見たとき、そう思いました。この祭壇画には元来仕掛けがあって、平日患者たちは十字架に架かったキリストを見ますが、日曜日になると中央パネルが左右に開かれて、右パネルには復活のキリストが現れます。患者たちは日曜日その復活した輝くキリストの姿を見て、自分たちの肉体もやがて変えられるという希望を強くしたのではないか、と思います。その後の設置場所の変化などで、残念ながら現在この祭壇画はそのような形式になっていません。ちなみに、聖アントニウス記念日の一月一七日にはさらにパネルが開かれて、第三の場面が現れます。

有一： おじさんのメールを読んで、この祭壇画のキリスト像から、去年のクリスマスの時に聴いた聖書の箇所を思い出しました。

「彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。……
彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。」
（イザヤ書五三：二、四）

はじめ： そうそう。この絵を介して、十字架に架かったキリスト、キリストの弟子たち、そしてアントニウス病患者たちが出会っています。

弟子たちにとってこのイザヤ書の箇所はとても重要でした。キリストが十字架に架かったとき、彼らはおそらく恐れや絶望から、家に閉じこもっていました。その後復活したキリストに出会い、自分たちが赦されたことを知り、あの恐ろしいキリストの十字架にどういう意味があったのかを考えていたとき、このイザヤ書の人物に、キリストを見出したのではないか、と僕は思います。弟子のペテロはその書簡で、**「その打ち傷のゆえに私たちは癒やされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、**

それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた」

（一ペテロ二：二四、二五）

という箇所をキリストのこととして引用しています。弟子たちはイエスが十字架上で自分たちの罪を担ったことを発見します。そして、アントニウス病の患者たちも、祭壇画のキリストを通じて、自分たちの病が担われた、と思ったのではないでしょうか。

（第二場面）右パネル復活のキリスト▶
wikimedia パブリック・ドメイン
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/8/81/Grunewald_Isenheim2.jpg

中谷博幸（なかたにひろゆき）

1953年奈良県生まれ。1981年京都大学大学院文学研究科博士課程（西洋史学専攻）単位取得退学。現在香川大学名誉教授。大学生の時KGKを通じて信仰に導かれる。主な研究対象はヨーロッパ文化史、特に宗教改革や敬虔主義などドイツ近世キリスト教文化。好きな芸術家は、モーツァルト、リーメンシュナイダー、ドストエフスキーなど。主な著訳書、『マルティン・ルターとその世界』（美巧社、2016年）、『キリスト教芸術との対話』（未知谷、2019年）、B・レック『歴史のアウトサイダー』（山中淑江と共訳、昭和堂、2001年）。

有一：

イザヤ書、キリスト、弟子たち、アントニウス病患者たち、そしてその絵を見る私たち。ひとつの絵を通して、歴史の重みを感じるなあ。おじさん、お忙しいところ、ありがとうございました。

はじめ：

今度会った時、もっと話しましょう。最近妙に、姉さんに会いたくなります。よろしく伝えてください。

有一：

その時、ホルバインの『墓の中のキリストの屍』についても、聞かせてください。母さんも、いつでも来てね、と言ってました。昔から、おじさんが苦しい時、母に会いたくなるとか。「スマイル、スマイル、ユーモアとは、にもかかわらず笑うこと」と言ってましたよ（笑）。お元気で。

2024版

本革聖書カバー

からしだねオリジナル

共同訳・新改訳聖書、旧約・新約聖書のB6版が入るサイズです

ローズピンク 2個

ミントブルー 2個

裁断からステッチまですべて手作業で仕上げたこだわりのカバーです

植物タンニンなめしのヌメ革を染料で染めた後、ワックスで仕上げたレザーを使用しています。

ムラ染めのような美しい発色のピンクとブルーの2色を、あえてシンプルなデザインで作成しました。使い込むごとに艶が出て、手触りもなめらかになっていきます。

8,000円(税込)

〈読書感想本〉

「トランプ大統領のパートナー」が語る、無視された白人労働者たちの感情

『ヒルビリー・エレジー』

J・D・ヴァンス／著　関根光宏・山田文／訳（光文社）　1,320円（税込）

「ドナルド・トランプ氏は、副大統領候補としてJ・D・ヴァンス氏を指名した」。昨年こんなニュースを耳にして、私はどこかで聞いたことがある気がした「J・D・ヴァンス」という名前を調べてみました。すると、数年前にベストセラーとなった『ヒルビリー・エレジー』の著者であるということでした。道理で聞いたことがあるはずです。2016年のトランプ旋風の背景を読み解くために必読の書として、当時話題になった記憶があります。

トランプを支持する白人労働者階層の置かれた状況と心情を、自身の体験を踏まえて分析した本――本書に対して、私はそんな先入観を持っていました。その本の著者がトランプのパートナーになる?これは一体どういうことでしょうか。「分析」というのは距離を取ることを前提とするはずです。とすると、つまりこれはトランプがヴァンスを取り込んだということでしょうか。反対に、ヴァンスがトランプを利用したということでしょうか。それともその両方なのでしょうか。いずれにしても、トランプと組んで副大統領候補となったという事実は、彼が単なる労働者階層を見下すインテリではないということを示しているように思えます。

ヴァンスが本書を書いたのは31歳の時です。彼は貧困な家庭で育ちましたが、海兵隊員となり、その後オハイオ州立大学、イェール大学ロースクールを修了し、弁護士となってアメリカンドリームを実現しました。『ヒルビリー・エレジー』は、白人労働者階層と、世界最高レベルのエリートが集まる大学という、一見無関係な二つの世界を渡り歩いた著者が、自身の半生を振り返りながら、アメリカの見過ごされてきた側面を描き出した本です。

彼の祖父母は、ケンタッキー州の田舎から、当時鉄鋼業が盛んだったオハイオ州ミドルタウンに引っ越しました。ミドルタウンを含む地域の産業はその後衰退し、今では「ラストベルト（錆びついた工業地帯）」と呼ばれています。彼によると、そこに住む白人労働者階層は、アメリカの中で最も将来に対して悲観的な考えを持っています。多くの人が、親世代より貧しくなっていると考え、大学への進学率は低く、最も賢く恵まれた子どもでも、オハイオ州立大学に進学するのが関の山。アルコールや薬物への依存が蔓延し、安定した家庭も少ない。自分たちの境遇を政府のせいにし、インテリが支配する政治に対して恨みを募らせる。彼らは嘲笑の意を込めて、「ヒルビリー（田舎者）」、「レッドネック（首筋を日焼けした白人）」、「ホワイト・トラッシュ（白いゴミ）」等と呼ばれています。ヴァンスもまた、そうしたヒルビリーの家庭で育ちました。両親は彼が幼い頃に離婚し、薬物依存の母親は何度も恋人を取り換え、子供たちを振り回します。気に食わないことを言うと、息子であっても激しい言葉で罵る母は、児童虐待で警察沙汰を起こしたこともあります。

そんなヴァンスのヒルビリーに対する思いは複雑です。家族に対する愛情や極端な仲間意識というヒルビリーの特徴を引き継いでいる彼は、地元への愛着やヒルビリー的気質への称賛を何度も口にします。他方で、自分たちの貧困を政府やエリートのせいにして自堕落な生活を送る地元の人々に対して、辛辣な言葉を投げかけてもいます。しかしそうした言葉からも、彼がヒルビリーの人々を、単に突き放したり、軽蔑しているのではないことが伺われます。独力でヒルビリーの貧困家庭から抜け出し、経済的な成功を手にしたという自負と、そのような道が現実に可能であるということをただ知らないために、シニカルで無気力になっている仲間たちに対するもどかしさとがまじりあっているのです。

本書だけで彼の人格や性格を判断することなど不可能です。したがってこれは本書を読んで私が受けた印象にすぎませんが、どうやら彼は冷静に考える知性を持っていると同時に、感情的なものに強く動かされる人のようです。特に故郷や家族への愛情は、彼にとってとても大きな原動力になっています。だから、リッチなインテリの世界の住人となり、ヒルビリーの欠点がよく見えるようになっても、彼の心はどうしてもヒルビリーを離れることができません。

イェール大学のロースクールに通い始めたころ、彼はガソリンスタンドで、甥がイェール大学の学生だという女性と出会います。しかし彼は、自分もイェールの学生であるということを言い出すことができません。エリート大学生の自分と、ヒルビリーの自分。その葛藤の中で、彼はヒルビリーの自分を選ぶのです。

彼女とその甥は、おそらくカクテルパーティーやディナーの席で、オハイオの野暮ったさや、オハイオの住民の宗教や銃への異常な執着を話題にして、笑っているだろう。私はそちら側に立つことはできないのだ。（文庫版343～344頁）

それと同時に彼は、自分の中にあるこのような強い感情を俯瞰的に見て分析することもできます。その上で、やはり自分はヒルビリーとして、その価値観に沿った行動をするのだと決めているように見えます。そのために必要な人脈は大いに利用しますが、それは全面的なコミットメントではなく、戦略上の関係に過ぎないともわきまえています。彼の中心的な価値は、あくまで家族や生まれ育ったヒルビリー文化への愛情なのです。

そのように考えると、彼が2022年の上院議員選挙の際に、過去に批判していたトランプへの態度を急変させたのも理解できる気がします。ソーシャルキャピタル（コネ・人脈が有する経済的な価値）の重要性を本書で何度も強調している彼にとって、大統領候補との関係は、最も大きな「ソーシャルキャピタル」に見えたのかもしれません。それを利用するためには、表面的な変節もいとわないのでしょう。

このような利害を見極めるドライさと、貧困白人労働者階層という自身の出自に対する愛憎相半ばする強い感情。この二つの要素がなければ、彼が「トランプ大統領のパートナー」という地位に着くことはできなかったように思われます。

一月二十日に行われるアメリカ大統領就任式で、彼は正式に副大統領となります。社会から忘れられ、エリートから馬鹿にされ、周辺に追いやられてきた（と思っている）ヒルビリーの人々にとって、彼が政治の中心に近づくことは、自分たちの声が聞かれ、自分たちの感情が認められたことを意味するのかもしれません。

結局この本を読んでも、私はトランプを支持するヒルビリーたちのことを理解することはできませんでした。私がこの本から学んだことと言えば、「ヒルビリーにはヒルビリーの感情がある」という極く当たり前のことにすぎません。それでも、ヒルビリーを（ひいてはアメリカを）「理解」することは、その当たり前のことを実感することからしか始まらないはずです。

書店員 G

ヒルビリー・エレジー
－郷愁の哀歌－

Netflix
で配信中

2024 秋のオンライン トークライブ 第一弾

第二弾のライブ内容は2回にわたり、書店だよりに掲載しています。前編は2024年12月号です。

2024年 11月22日（金）15時～

『争いや分断の時代にあって、「どんな本を出したいですか?」、「本と対話する私。本を通して人と対話する私」』

米本 円香さん（いのちのことば社編集者）
水野 健さん（フリーの巡回牧師・クリスチャン終活セミナー講師〈著作あり〉）
坂岡 恵（CLCからしだね書店店長）

「日本語の美しさ、クリスチャンだからこそ「ことば」を大事にしたい。」

坂岡：「福音」を語るのだからこそ、美しい日本語で語りたいと思います。今、俳句が流行っていますね。若い芸能人も俳句の番組に出て、ことばのセンスを磨いています。俳句は、言葉を凝縮し、選びに選んで、五七五のなかに的確にはめ込んでいくという、言葉のセンスが必要な、日本語の良さを凝縮した文化であり芸術です。俳句甲子園なんかもありますが、若い世代は言葉の持つ面白さもよくわかっている世代だと言えます。クリスチャンだからこそ、ことばを大事にしたいです。

米本：語彙は、動画を見ているだけではなかなか増えないですね。やはり本を読まないと増えないと私は思っています。

水野：ある教会で、記念誌を出すお手伝いをして、プロの編集者からのアドバイスも受けながら、「ちょっと、ここは書きなおしてください」と言う役をしました。でも、エライ先生だとなかなか「書き直して」と言えなくて、そのままスルーしてしまったことがあります（笑）ある宣教団体の通信レターなんかも、何書いているのかさっぱりわからなくて、宣教団体の委員会に「文章の書き方」の本を渡して「まずは、これを読んでみてください」とえらそうに言ってしまったこともありました。（笑）段落、表現など、文章をきれいにしていくのは、大変な作業ですよね。

坂岡：編集の方のご苦労は、今の水野さんの話に凝縮されていたような…

水野：エライ先生だと、言えないでしょ?

坂岡：言えないですか?!

米本：（苦笑）いやいやいや…。

坂岡：言葉にこだわっている筆者だと、いろいろ難しい注文もあるんでしょうね。「これはわざと漢字で書いてるんだから、仮名にするな」とか。

米本：「点（、）を消すな」とかは、ありますね。

坂岡：そういう場合は、編集者として、どうされるんですか?

米本：著者の意向に従います。明らかな間違いじゃない限りは。

水野：いのちのことば社の出している月刊誌、薄くて小さい「いのちのことば」ですが、あれは、たいへんおもしろいですよね。

米本：ありがとうございます。情報もあり、新しい本の紹介もあり、連載のエッセーもありという、もりだくさんの内容です。

坂岡：あれも、ぜひ皆さん、読んでいただけたらと思います。うちの店に来ていただいたら、ただで配布しています。あ、あれ、実はただではなくて、ちゃんと値段がついていて、書店はちゃんと仕入れているんです。ただではなくて!

米本：年間購読もできます。

「厳しい経営の出版業界、キリスト教出版社が生き残るために…」

坂岡：出版業界は、とても厳しい時代になりました。中でもキリスト教の出版業界は、キリスト教人口そのものが少ないので、たいへん厳しいですね。

米本：「書店離れ」「本離れ」と言われ、国も「書店振興プロジェクト」を起ち上げたくらいです。いのちのことば社に関して言えば、2025年で創業75年になるんですが、創業当初は直営店が26店舗ありました。でも今は6店舗です。月刊誌、雑誌、新聞の売り上げも下がってきています。厳しい現実です。

水野：いのちのことば社は、いつも「厳しい厳しい」とおっしゃっているんですが、どうやって、会社を維持しているんですか?

米本：（苦笑）…主のあわれみにより、ですね。

水野：なるほど～。それで、具体的には?

米本：やっぱり、新刊を出し続けるということで、支えられていることもあります。

水野：直営店が少なくなって、書店も少なくなって、本屋に人が行かなくなって…。でも本は手に取ってみないとなかなかよくわからないものだと思います。だから私も、教会では、皆さんに本を手にとってみてもらうようにしています。

米本：私達も日曜日に、「文書伝道デー」と言って、教会に本を持って行って文書伝道の証しをし、書籍を販売させてもらう働きをして

います。いのちのことば社公式の「ぷんでんチャンネル」というYouTube動画も作って発信しています。

坂岡：動画作りを継続するのは、担当の方もなかなか大変ですよね。

水野：以前だと、三浦綾子さんや星野富弘さんなどの社会的にも有名な人の本がぱっと売れました。そういうヒットがひとつあると売れるものなのでしょうか？

米本：確かに、本が売れるにこしたことはないですが、ヒットを狙うやり方は、リスクもあります。ヒットだけに頼ってしまうと、博打のようになります。良質なメッセージをもった本を、地道に出版し続けていくことが大事だと思います。

「キリスト教出版社、キリスト教書店としての使命」

坂岡：いのちのことば社さんは、たいへん大きな使命感をもってやっておられると思います。その使命感は、働く人が替わっていく中で、どんなふうに引き継がれるのですか？

米本：「文書伝道」という志をもって始められたものなので、先輩たちから受け継いだものを次へと引き継いで、形にしていくことが大事だと思います。文書伝道の働きはさらに遡ると、聖書自体も、ずっと受け継がれてきたものが、書物として現代に存在しているんですよね。いのちのことば社は単なる出版社ではなくて、その名の通り、「いのちのことばを伝えている」という思いが、他の出版社とは少し違います。「いのちのことばを世の中に出していく」という使命を果たしていきたいです。細々であっても、出し続けていきたいです。

水野：書店の店長さんとしては、ご苦労とかありますか？

坂岡：うちは、コロナの真っ最中に、CLC京都店を引き継ぎました。苦労を重ねて一生懸命頑張ったけれど、とうとう閉鎖することになった京都のキリスト教書店に、全くの素人が「引き継がせていただいても、いいですか…？」とおずおず手をあげました。うちの書店の経営が成り立っているのは、本体が社会福祉法人で、就労継続支援B型事業所という福祉制度を使って、障がいのある方が働く場として書店を運営しているからです。そうすると、例えば就労支援の仕事（書店の仕事を含めて）をする職員の人件費は、書店の利益からではなく、施設会計から支出することになります。書店の売上から諸経費を差し引いた利益は、障がいのある利用者さんの「工賃」になるので、当然、儲けは出さなければなりませんが、書店の経営としてはなんとか成り立つので、他の地域でもやったらいいのになと思います。でも、本が出版され続けないと、書店は成り立ちません。だから、新しい本を作り続けてくださる出版社にがんばっていただきたいのですが、「がんばって」と他人事のように言うだけではだめで、みんなが協力してがんばらないといけないと思います。

「出版社がつぶれてしまったら？という危機感を共有したい」

水野：今の書店の課題はありますか？

坂岡：若い人があまり来てくださらないです。今来てくださっているお客様方は、私も含めて、どんどん天に召されていきますので（笑）そうしたら、いったい誰が書店に来るのでしょう？

水野：モニターを作って、いろいろな意見を聞くと、改善できるところがわかるんじゃないかと思います。たとえば書店が遠くても、行く人は行く。本以外になにか惹かれるものが必要だと思います。書店が出版社と協力して、対話しながら考えていくことが大事ですね。

2024年 11月22日（金）15時～

米本：全くその通りですね。もはや「うちだけが生き残れば良い」という時代ではないと思っています。キリスト教出版の働きも、垣根を越えてみんなで協力し合うことが、とても大事だと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

坂岡：変なこと言いますが、ごめんなさい！「もし、いのちのことば社がつぶれたとしたら」と想像していただいたらわかると思うんです。今、文書伝道について、教会、キリスト教出版社、中継卸店、書店、みんなで考えていくべき逼迫した状態になっていると思います。キリスト教出版社がつぶれてしまったら、全国の教会は、ものすごい痛手を受けます。教会の中の文書伝道の部分が、ごっそり抜け落ちるわけですから。教会はそこにもう少し危機感を持っていただけたらなあ、と思います。

水野：そうですね。牧師も、教会のなかに信仰書コーナーを作るなど、信徒にアピールしていくことが必要だと思います。

「明るい未来に向けて、何ができるのか？」

坂岡：いやなことばかり言いましたが、明るい未来、可能性について、どうお考えでしょう？

米本：じつは私は、コロナの時に、もっとできることがあったんじゃないか、と思っています。たとえば一般の書店にも、人生の指針になるような本がいっぱい並びました。昔からある「論語」など、今も読まれています。コロナでみんなが悩んでいたときに、もっと聖書を売ってもよかったのではないかと思うのです。あのコロナ禍でキリスト教界の中だけでなく、一般社会に向けて発信できるものがあるはずでした。「愛」や「死」について、聖書的な価値観をもっと発信できたはずなのに、それをあまりしてこなかったなと思います。今、世界では、コロナなどの疫病以外にも、戦争や災害は起こり続けています。キリスト教出版社として、希望をもって発信できるものがたくさんある、というところに、私は可能性を感じています。

坂岡：このあいだ、病院の地下のコンビニの横に、「人生とは？」「病むとは？」「生きるとは？」といったテーマの本が並んでいました。病院の片隅のちょっと一息つく場所だからこそ、病気と闘っている人や親しい人の病に寄り添って人たちは、本をそっと手に取るんだと思います。そんな本が、病院の販売コーナーだったり、街角のどこかだったりに、さりげなく置かれていて、通りがかりの誰かの心に光を灯すかもしれない…ということに意味があるのではないか？と思いました。いのちのことば社さんには、そういう本を出し続けていただきたいと思います。

水野：いのちのことば社がつぶれたら、世の中、真っ暗になるので、がんばってください。ある編集者の友人に、牧師の説教って、下手だ。もっと一般の話を聞きに行けと言われて、聞きに行ったけど、いや、牧師の話って、そんなに下手じゃないですよ。聖書に関する本も、悪くないです。それが普通の本屋にも並ぶようにしたいですね。あと、良いライターを増やしていくのも大事です。

坂岡：最後に、水野健さんの本の紹介を！

水野：「終活」の本が、いのちのことば社から出ました。なんと、56ページ、600円のお手頃な本です。私の講演やセミナーで話したことがまとめてあります。最後には私のちょっと悲しい話も出ています。回し読みしないで、買って読んでください。（笑）

坂岡：お安いですよね。ぜひ皆様、ご購入ください。

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。（受付できないものもありますので事前にお知らせください。）

【献本をお願いしたい本の種類】

1　キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
2　哲学、心理学等、人の生き方に関する本
3　社会の中で起きている問題を扱った本
4　暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
5　小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
6　漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌、自分史・教会の記念誌などは受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店　献本係　　電話：075-574-1001　FAX：075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

貝出久美子様、**中村富枝**様、**坪井久子**様、**福本佐和子**様、**伏見隆次**様（順不同）

12 月の古書の収益は 18,080 円でした。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】

献本くださった方のお名前を書店便りにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。◆世界がすごい勢いで変化していくのを感じます。今年はどんな変化が起きるのか？少しでも良い変化をもたらす年であってほしいと願います。◆そんななかで、新しい連載「歴史と対話し歴史に学ぶ」が始まりました。アインシュタインは、「過去から学び、今日のために生き、未来に希望を抱く。大切なのは、私達がまったく疑問を持たない状態に陥らないこと」という名言を残しました。今年はそんな年にしたい、いや、しなければならないと思います。◆2025 年、世界のあちこちで小さな平和が実現していく年になりますように。【店長】

トークライブでもお知らせしました。いのちのことばから出された「終活」の本はこちらです！

キリスト教の終活のおはなし　著：水野健
税込価格：660 円　56 頁

「キリスト教の終活セミナー」として各地で話してきたことをまとめた小冊子。自分の人生を振り返り、与えられた良きものを再発見し、生きてきた恵みを味わうよう導く。葬儀や埋葬など実際なことにも言及してある。
https://www.kyobunkwan.co.jp/xbook/archives/115021

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援Ｂ型事業所からしだねワークス
からしだね書店＆カフェ・トライアングル
〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号　075-574-1001　ＦＡＸ 075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店便りのバックナンバーはこちらから